

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

国家公務員共済組合連合会虎の門病院での研修を終えて

千葉県がんセンター食道胃腸外科

黒崎 剛史

この度、日本臨床外科学会の国内外科研修制度により、国家公務員共済組合連合会虎の門病院外科で令和5年11月6日から11月19日の期間で施設研修をさせて頂きました。千葉県がんセンター食道胃腸外科の黒崎剛史と申します。このような機会を与えて頂きました日本臨床外科学会の万代恭嗣会長、国内外科研修委員会の高山忠利委員長をはじめとした委員の皆様、また、ご多用の折、研修を受け入れて下さった消化器外科の黒柳洋弥先生をはじめ、研修前より連絡を取らせて頂いた花岡先生、手術を快く見学させて頂いたスタッフの先生方、忙しい中アテンド頂いたレジデントの先生方に深謝申し上げます。

私が研修させて頂いた虎の門病院消化器外科（下部消化管グループ）は日本でも有数の手術症例数を誇ると同時に、特に内視鏡外科分野においては方法論の確立ならびにその教育にご尽力されている施設であり、その教育環境・指導方法を実際に見て経験したいと考え応募させていただきました。私は今後、大腸外科をサブスペシャリティとしていく予定で、研修期間中は下部消化管グループの手術を見学させていただきました。研修の2週間の中で、症例は右半結腸切除や脾彎曲近傍の横行結腸切除、直腸低位前方切除術まで、短期間ではありましたが多岐に渡る術式の鏡視下手術を見学することができ、新しい発見の毎日でした。

チーム全体で術式・手順に対しての共通認識が確立されており、その正確性には大変感銘を受けました。特に、進行直腸癌に対しての鏡視下低位前方切除術において、安全性を担保した上で正確なlayerで直腸の剥離・受動を行うための考え方や、術野を良好に保つための展開の工夫など、これまで私が経験してきたものとは異なっており、正に目から鱗といった気持ちでした。

また、黒柳先生を始めとしたスタッフの先生方の指導の下、私より若い先生方も術者として経験を重ねておられること、後進の指導にも特に力を入れられていることが強く印象に残りました。雑談の中ではありましたが、「30代後半～40代前半の外科医が手術の中心にいない施設は、継続性が生まれない。」との言葉が大変印象的でした。同時に、若い先生方も生き生きと活躍されている姿にも良い刺激を受けることができました。後期研修医の早い段階から執刀も含めて手術に主体的に関われることは、若いうちから手技的な意味で成長・成熟を得られるだけでなく、主治医としての自覚を育むような教育的効果もあるように感じられました。今後、教育的立場に立つ機会が増えてくるかと思いますが、その際には今回の経験を生かして行けたらと思います。

2週間という短い研修期間ではございましたが、術中・術後のトラブルシューティングなどこれまで臨床で経験した疑問に対するアドバイスも頂くことができ、有意義な研修をさせていただきました。他施設の医療を学ばせて頂く中で現時点での自身の到達度や、普段自身が取り組んでいる外科医という仕事について客観的に見ることもできたことも、大きな収穫でした。

末筆になりますが、本研修に私をご推薦いただきました当院の鍋谷圭宏先生、私を快く研修に送り出してくださった当科の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

